たった今、現代医学が敗北しました

回収屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たった今、現代医学が敗北しました

【Ｎコード】

Ｎ７２９８Ｘ

【作者名】

回収屋

【あらすじ】

Ｗｉｉ版バイオハザードのギャグパロです。各キャラの人間性はオリジナルとは異なり、完全に崩壊しております。御読みになられる際は正装（もしくは全裸）で御読みください。より一層御楽しみいただけます。

序章

――ラクーン市警に所属している特殊部隊・通称『S．T．A．R．S．』――

――ブラヴォーチームを乗せた捜索用ヘリが消息を絶つ――

――その事実が同市警のスポークスマンによって明らかになった――

――ラクーン市警の発表によると、昨夜、S．T．A．R．S．の同チームは遭難者が相次ぐアークレイ山地・ラクーンフォレストの現地調査に出動した――

――が、本日未明の通信を最後に……連絡が途絶えたとの事――

――同市警では何らかのトラブルに巻き込まれた可能性が高いとして、目撃者の証言を求めるとともに、今夕にもS．T．A．R．S．アルファチームを捜索に投入する方針となった――

――ラクーン郊外では近年、猟奇殺人事件が多発し話題になっていたが、今回の事件で一層住民の不安を招くことになった――

――連絡が途絶えたS．T．A．R．S．ブラヴォーチームの捜索に赴いたクリス等隊員達は、怪犬の群れに襲われ、洋館に逃げ込む――

――――　だがそこは……幾多のモンスターを生み出し、事件の原因を作った恐怖の研究所をカモフラージュするための館だった

――

――　館に閉じ込められたＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．メンバーのクリスとジル達は、脱出口を求めて彷徨ううちに、事件の真相を知ることとなる……　――――

＞ｉ３３２２０―３９６１＜

※本作品には暴力シーンやグロテスクな表現が含まれます。
※本作品に登場する人物・団体・クリーチャー等は実在のモノとは異なります。
※本作品に使用される挿絵はプライバシー保護のため加工されております。
※尚、作品内容を声に出して読む事はおすすめしません。御両親が泣きます。

墜ちないヘリは、ただのヘリだ

私の名は『アルバート・ウェスカー』。特殊部隊『S．T．A．R．S．』のリーダー。実年齢よりずっと若く見えると、近所の奥様方からよく言われるナイスガイだ。チャームポイントは金髪のオールバックと、愛用の黒のサングラス。今、私は非常に困惑している。何故なら……さっきまで私達が乗っていたヘリが墜落し、目の前で派手に炎上しているからだ。運良く我々は大したケガもなく大破したヘリから脱出できたのだが、これに関しては完全に予定外だった。当初の予定としては、私がヘリに施した細工で突然の故障に見せかけ、山中に不時着させる手筈だった。が、神様のイタズラというか……悪魔の慈善事業というか……私の部下の一人、つまり、S．T．A．R．S．メンバーの一人が飛行中のヘリの中で、いきなりオートマチックを発砲しやがったのだ。放たれた9ミリ弾はコントロールパネルに命中し、ヘリは完全に制御不能。なんとか当初の目的ポイント付近には降りられたが、危うく全滅するところだった。で、今からこの事態を引き起こした張本人に発砲した理由を聴こうと思う。

「おい、ジル……」

パアァァァァァァ――――――ン！

「うわおッ！？」

その人物の名を呼びながら肩に手を置いたら、振り向きざまに撃ってきやがった。私は華麗にブリッジして回避したが、一体、何のつもりだ！？

「ああ、なんだ……ウェスカーか」

その女はそう言って辺りをしきりにキョロキョロしている。完全に落ち着きを失ったその様子から、よほどの事がヘリの中で起きた

に違いない。
「冷静になれッ！　まずは銃をホルスターに戻してワケを話すんだ。どうしてヘリの中で発砲なんかした？」
私はサングラスを人差し指でクイッと直しながら、その女性隊員と向き直った。
『ジル・バレンタイン』――２３歳。血液型・Ｂ型。身長１６６センチ。体重ＨＩ☆ＭＩ☆ＴＵ。手先の器用さを活かし、爆発物処理のエキスパートとして活躍。米国陸軍のデルタフォースの訓練課程を経験するなど、身体能力や専門知識のレベルは高い。ただし……
「ゴキブリよッ！　ヘリの中をゴキブリが這ってたのよッ！」
「……は？」
「あたしの視界に入った以上、生理的にダメな生き物は全て滅するべェェェェし！！」

パァァァァァァァン――――――！

「うわおッ！？」
このアマ、またしても私に向かって撃ってきやがった。どうやら直感的にゴキブリと同列に並べられたらしい。
「さすがは中間管理職。避けるのが上手ね……ひッひッひッ、ヒャァァァァ――――はッはッはッ！」
彼女はテンションが一定以上まで高ぶると、己を見失ってやたらと攻撃的になるコトが最近判明した。
「痛ぅぅぅぅぅ――――ッ！　し、尻がぁぁぁぁぁぁ――――――ッ！」
すぐ近くで悲鳴が上がる。男性隊員の一人が跳び上がってなんだか痛がっている。どうやら、さっき私が避けた９ミリ弾が流れ弾となって命中したらしい……尻に。
「ウ、ウェスカー、大変だッ！　オレの尻が何者かに狙撃されたッ！　きっと敵国の陰謀に違いないぞッ！」

山中で野郎の尻を狙撃する敵国ってナニ？
「静かにしろ、クリス。まずは周辺に散乱した装備と物資を回収するんだ。その後、ここから北東２キロの地点にある洋館へと向かうぞッ！」
「わ、分かった。すぐに準備する！　お～～、ヒリヒリしやがるぅぅぅ～～……」
そう言って自分の尻の状態をなんとか鏡で見ようと、体をひねってマヌケにクネクネしている男――
『クリス・レッドフィールド』――２５歳。血液型・Ｏ型。身長１８１センチ。体重８０．５キロ。チームで？１の射撃技術を持つ実力者。元空軍パイロットで、アルファチームのヘリ操縦も務める。観察力、洞察力に優れ、実戦経験も豊富。臆する事を知らぬ精神力と、鋼の肉体を兼ね備えているが……
「げッ！　ウェスカー、マジでヤバイ！　さっきの狙撃でオレの尻が割れちまった！」
「……クリス、尻はみんな割れている」
「な、何だってェェェ！？　それじゃあ、みんなも既に尻を狙撃されたってワケか！？」
――彼に悪気は無い。単に知能が他の人より極めて残念なだけなんだ。そう……彼には悪気も罪も無いのだ。
「ちょっと、ウェスカー」
「何だ、ジル？」
「ここから北東２キロに洋館があるって……どうしてそんなコトまで分かるのよ？」
しまった。私としたことが、ストーリーを進める事に気を取られて、とんだ失言をしてしまった。このままでは、この私が実はこの事件の黒幕の一人であるコトがバレてしまう。何とか騙し通さねばならない。そして、私はひらめいた。
「私のサングラスは特注だ。不可能は無い」
「なるほど。さすがだわ、ウェスカー」

自分で言うのもなんだが、今の適当過ぎる切り返しで納得すんなよ。この女、クリスに負けず劣らずのバカかもしれない。
（……ん？）
急いで装備と物資を掻き集めていると、大木の陰に隠れるようにして立ち尽くしているオッサンを発見。私は一応声をかけてやる。
「おい、バリー。そこで何をしている？　もうすぐ出発するぞ」
オッサンは私に声をかけられ、一瞬、ビクッと全身を震わせた。で、何者かから狙われている被害者みたいに、辺りをキョロキョロと憔悴した面持ちで見渡している。
「お、俺は行かないッ。冗談じゃない……夜中にこんな山中を進むなんて、マツ〇ＤＸの前でパンツを脱ぐようなもんだッ！」
例えの意味はよく分からないが、彼は完全に怯えきっていた。
『バリー・バートン』――３８歳。血液型・Ａ型。身長１８６センチ。体重８９．３キロ。元ＳＷＡＴ。火器関係の知識が豊富で、隊内での火器の整備・補充を担当。モイラとポリーという二人の娘がおり、家族を大切にしている。けれど……
バサバサバサッ――――！
「ふぎゃあああああああああああああああああああああああああ――――ッッッ！！」
バリー、絶叫。
「落ち着け！　野鳥が羽ばたいただけだ！」
オッサンは極度のビビリだった。カッと両目を見開き、口をアングリと全開にし、その場に力無くへたれこむ始末だ。
「よし、全員出発するぞ！」
真夜中の行進が始まった。これから先、我々の身にどのような怪現象や敵やトラップが待ち受けているか……私だけが知っている。さっきも言った通り、私は黒幕の一人。今回はＳ．Ｔ．Ａ．Ｒ．Ｓ．のメンバーを使って、アンブレラ社が開発したＢ．Ｏ．Ｗ．（生物兵器）と一定の環境下で戦わせ、その実戦データを記録するのが主な目的だ。そこから得られたデータはＢ．Ｏ．Ｗ．の更なる性能向

上につながり、アンブレラ社は“次なる段階”へと発展できるだろう。

＞i33221－3961＜

『アンブレラ社』――アメリカでの家庭用薬品シェア90％を誇る、全米？1の巨大複合企業であり、その裏の姿は、細菌兵器や生物兵器を開発する死の商人。

今回は、アンブレラ社が管轄する地下研究施設の一つに事故が発生し、施設及び、偽装のために建てられた洋館までもがウィルスに汚染された。で、アンブレラの上層部から私に指示が下ったワケだが……私には上層部の思惑とは別に目的がある。研究施設の最深部に保管されている、オリジナルの『T－ウィルス』を首尾良く奪取し、アンブレラのライバル企業への手土産とするのだ。今回得られるであろう貴重な実戦データとともに。

（ただ、問題は……）

私は隊列の先頭に立ち、チラッと後ろを振り返る。

「なあ、ジル。署内の連中がオレのこと見ながら、“ゴリラだゴリラ”って指差して言うんだけどさあ、どうしてだ？」

「脳筋でマッチョで、デスクの引き出しに常にバナナを常備してるからよ」

バナナ片手に歩くクリス。おい……拳銃はどうした？

ロケラン担いで歩くジル。おい……いきなりソレはねえよ。

「やっぱ危ねえよ、ウェスカー！　蚊に刺されてかゆくなったトコをかいて、そこからバイ菌が入ったり、野犬の遠吠えでビックリしてショック死するかもしれんッ！　なあ、引き返して救援を待とうッ！」

文句ばっかたれるバリー。おい……娘の写真を握り締めて泣くな。

（まあ、いい。洋館に着きさえすればどうにでもなる）

そう思いながら我々は行進を続ける。

私はアルバート・ウェスカー。
果たして、何人が明日の朝日を浴びられるだろうか。あるいは――

こういうヤツは大抵、次のシーンで死ぬ

やあ、みんな。私の名はアルバート・ウェスカー。前回のエピソードを読んでくれた人達は知っていると思うが、私は今、数名の部下を引き連れて真夜中の山中を行進している最中だ。クリス、ジル、バリー……三名とも非常に有能な部下で、どれだけ有能なのかＲＰＧ風に説明すると、ラスボスの魔王相手に竹ヤリ装備して突っ込んでいく勇者ぐらい有能である。

「なぁ、ウェスカー……今、獣の唸り声みたいなのが聞こえなかったか？」

私の隣でショットガンを構え、しきりに周囲を警戒している男が小声で呼びかけてきた。彼の名は『ジョセフ・フロスト』――２７歳。血液型・Ｂ型。身長１７９センチ。体重７２．３キロ。チームの整備技師。危険物取扱いなどの資格を持ち、車軸整備を担当。血の気が多く暴走気味な性格で、緊急時の行動には不安がある。ちなみに……もうすぐ死ぬ予定。何故なら、さっきから死亡フラグの乱立が止まらないから。Ｂ級ホラー映画で最初に死ぬ名も無い出演者――と同様の空気をかもし出しているし。銃を構えて周囲を警戒する仕草が全体的に小物っぽい。こういう輩は、見ている人達に最初のインパクトを与えるためだけに大概が犠牲になる。本人は悪くないが、犠牲になる。

＜ん？　何だ？　何かいるのか？＞　↓　＜武器を構えてオロオロ＞　↓　＜な、何だ……気のせいか……＞　↓　＜うわあああああああああああああッ！！＞

――レギュラーキャラになれないヤツは、上記のような単純な流れで事務作業のごとく片付けられる。悲しいが、それが自然の摂理であり、それがゲームのプロデューサーの意向である。

ザッ……ザザザッ…………

辺りの雑木林から聞こえる、何者かが接近しつつある音。

「おいおい、何だよ……？」

「さあね。でも……あまり友好的な雰囲気じゃあないわね」

相手の姿は目視できない。が、確実に耳に届いてくる草木が何かに擦れる音……クリスとジルが背中合わせで警戒する。さすがは私の部下。この程度では全く動じない。

「ひぃいいいいいいいいいい――ッッッ！　何かいるぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！」

バリー、やかましい。産まれたての小鹿みたいに脚を震わすな。

（さて、そろそろ走るか）

これも私が施した仕掛けの一つだ。この近辺にＴ―ウィルスに侵された犬、いわゆる“ゾンビ犬”を数匹配置しておいた。

『ケルベロス（ゾンビ犬）』――ドーベルマンをベースに造られたＢ．Ｏ．Ｗ．。研究施設内でのバイオハザードに伴い、飼育場から脱走。付近の森で野生化していた。犬本来の俊敏な動きや習性を失っておらず、他の個体と連携して獲物に襲いかかる。

ザザザザッ――――！！

「うッ、うおおおおおッッッ！？」

パアァァァァァァァァ――ン！！

ジョセフの叫び声とともに鳴り響く、ショットガンの発砲音。が、銃弾は命中せず、一体の黒い影が勢い良く跳びかかってきて――

＞ｉ３３２９｜３９６１＜

「わんわんおッ、わんわんおッ、ボクはわんわんおだおッ☆」

――しゃべった？

「た、助けてくれェェェェェェ――――！！」

ジョセフの喉元にガブリと食いついている。同時に、次々と別のゾンビ犬が草むらの中から跳びかかってきて、倒れているジョセフの腕や脚に食らいついていった。
（……んん？）
ウェスカーが小さく首を傾げる。何だか……様子がおかしい。食らいついてはいるが、ジョセフからは特に出血している様子も、肉を食い千切られている様子もうかがえない。まるで、与えられたオモチャと戯れているみたいだ。
「わんわんおッ、久しぶりの獲物だおッ！　ゆっくり遊んでいくんだおッ☆」
ゾンビ犬なのに、妙に無邪気な笑顔だ。肉体の所々が腐敗し、片目なんか飛び出しちゃってるのもいるんだが、連中は教育番組のアニメキャラみたいな声でしゃべって、とっても楽しそうにじゃれている。
「ジョセフ！　今、助けてあげるわッ！」
「待て、撃つんじゃない！　あれだけ密着した状態ではジョセフにも当たってしまう！」
オートマチックを構えて今にも引き金を引きそうになっていたジルを制し、私は冷静に観察することにした。
（おかしい……ヤツ等はもっと凶暴で、人など容易に噛み殺してしまうハズなんだが……もしや、野生化して何だかの突然変異でも起こしたのか！？）
キラ～～ン☆
考えのまとまったウェスカーのサングラスが煌めく。
キラ～～ン★
ジルが手にするオートマチックの銃口が、月明かりに照らされて一緒に煌めく。つまり――
パアァァァァァァァァ――――ン！

撃ちやがった。銃弾は群がるゾンビ犬に……
「いっでええええええェェェェェェェェ！！　畜生ッ、ジル！　ドコに撃ってやがるッ！」
……いや、ジョセフに命中した。やはり、尻に。
「びっくりしたおッ！　ボク達はただ、人肉をハムハムするのが好きなだけなんだおッ！」
そう言って慌てて散っていくゾンビ犬の群れ。逃げていくその後ろ姿は何故だかキラキラしてて、外見がグロでさえなければ微笑ましい光景なのだが。
「あはははははぁぁぁ～～♪　まてまてぇぇぇ～～♪」
状況を勘違いしまくったクリスが、バンザイしながら爽やかな笑顔で追いかける始末。おい、止まれ。どんだけアクティブなムツゴロウさんだよ。
「追うんじゃない、クリス！　まずはジョセフの手当てが先だ！」
私にとっては完全に予想外だった。完璧に死亡フラグが立ってたんで、ジョセフはここで“オラは死んじまっただァ～～♪”……になるハズだったのだが。
「おおっと、そうだった。おい、ジョセフ！　傷の具合は……こ、コイツはッ！」
「どうかしたの、クリス？」
「ケツが割れてるッ！　そうか……ジル、全てはオマエの陰謀だったんだなッ！」
「ああ……面倒臭い」
――――パンッ！
イラっとした顔でジルがまたしても発砲。
「うわおッ！？」
クリス、自分の尻を両手でかばいながら飛び跳ねる。
「……おい、いいかげんもう行くぞ」
ゾンビ犬に追いかけられて洋館に逃げ込むという算段は無しになったが、我々が洋館に行くという予定に変更は無い。

「ウェスカー……俺の事は気にせず先に行ってくれ。ケツが痛すぎてまともに歩けそうもない……」
ジョセフの表情がとっても微妙。ゾンビ犬に食い殺されそうな光景にみまわれながら、結局、味方から尻を銃撃されてリタイア。
「安心しろ、ジョセフ。後で救助隊のヘリに連絡しておく。ボラ〇ノール持参で急げとな」
私はそう言ってサングラスを不敵に光らせた。
「ああ、軟膏タイプで……よ、よろしく……ぐふッ……」
ジョセフ、果てる。
「おい、バリー！　いつまで木陰に隠れている。走るぞッ！」
少し離れた所で、大木の陰から顔面を半分だけのぞかせてこっちをうかがうバリー……仲間を助ける気はハナっから無し。
「すまん、ウェスカー……俺もここでリタイアだ」
バリーの額が大量の脂汗で濡れている。そして、股間も濡れている。
「ま、まさか……４０前のオッサンがか！？」
バリー、家で帰りを待つ妻と二人の愛娘に何て言う気だ？　病気もケガも無かったが、失禁はしてしまった……そう告白する気なのか？
（まさか、ここまでヘタレだったとは……私の考えが甘かった）
私は気まずい気持ちを胸にしまいながら、ゆっくりと踵を返した。さようなら、バリー。オマエも立派なメンバーだった。
――――パンッ！
「うわおッ！？」
バリー、木陰から跳び出す。いきなりジルに発砲されたから。
「全速力で走れよ。早く乾くかもよ」
このアマ、すべからく暴力で解決しようとしやがる。
――と、いうワケで、私達はささやかな月明かりを全身に浴びながら、呼吸を荒げ、鬱蒼とした山中を駆け抜けていく。そして、数

分後……到着した。
「こ、コレが……その洋館なのか？」
クリスが呆けた声で建物を見上げる。
「何か……禍々しい空気が漏れているわ」
目を細めて警戒するジル。
（さて、諸君。ここからが本番だ。しっかりと戦闘データを記録させてもらうぞ）
口元をわずかに歪めて微笑む私、ウェスカー。生か死か――この館の中で待ち受けているのは――
「……あ、ホントに乾いてる」
バリー、空気読め。

金持ちの屋敷＝デカイ・不気味・ダレもいない

ギギギィィィィィィィィ～～……

正面玄関の大きな扉が、静寂に軋む音をたたせてゆっくりと開いた。

「これは……見事な豪邸だなあ！」

＞ｉ３３４７５―３９６１＜

私はわざと驚いてみせた。この洋館は、地下に建設されている実験場を隠すための大がかりなフェイク。そして、今から私のカワイイ部下達が死闘を演じる巨大な迷宮となるのだ。

「ちょっとォォォ～～、ダレかいるゥゥゥ～～！？」

ジルが呼びかけてみた。不法侵入したにも関わらず、全く人が出てくる気配が無い上、物音一つしない。やたらと広い玄関ホールに四人の生存者――まさにホラーの王道的スタートだ。

「よし、まずは全員の装備と持ち物をチェックだ」

そう言って私はクリス・ジル・バリーの三名と目を合わせる。この巨大な館の中には性能をある程度調節しておいたＢ．Ｏ．Ｗ．が、各ポイントに配置されている。全く武器を持っていない状態で館の中をウロつかれても、適切な戦闘データの回収はできない。部下達がどんな装備や道具を準備しているのか、上司である私がしっかりと把握しておかねば。で……

――――――　数分後　――――――

「……おい」

私は床の上に片膝を落とし、“考える人”のポーズをとっていた。

床の上に陳列した持ち物一式に対する、私なりの最大のリアクションである。では、簡単に紹介しよう。

●クリス＝バナナ（黄色）、バナナ（黄緑）、バナナ（腐りかけ）、バナナ（ヌイグルミ）

「クリス、支給された拳銃はどうしたんだ？」

「すまん、家に忘れた」

「で、オマエのバックパック……何故、バナナだらけなんだ？」

「おいおい、ウェスカー。知ってるだろう？　オレが一定時間ごとに新鮮なバナナを摂取しないと、命にかかわる発作が起きるのを」

「いや、初耳だ」

「そうか。なら、今から説明を――」

「いや、結構だ」

私はクリスの発言権をサラッと無視して、自分のホルスターから予備の拳銃を抜いた。

「コレを使え」

そう言って私がクリスに手渡したのは、『ベレッタＭ９２ＦＳ』。９ミリパラベラム弾が装填されたオートマチックの拳銃だ。そして、次……

●ジル＝ケータイ、コスメポーチ、自爆スイッチ（乙）、自爆スイッチ（甲）

「ジル、さっきオマエがクリスとジョセフの尻を撃った拳銃はどうした？」

「ここに来る途中で捨てたわ」

「……は？」

「だって、むさい野郎二人を撃った銃なんかもう使いたくないし」

じゃあ、最初っから撃つんじゃねえよ。

「で、どうしてケータイが？　無線機を持ってるだろう」

「やだッ、ウェスカーったら知らないのォ？　今はケータイで登録

しておくだけで生理日予測ができるのよ～～、ルナ〇ナで」
　何の心配してやがる。
「後………『自爆スイッチ』ってサインペンで書かれている、この縄跳びの持つ手みたいな装置は何だ？」
「ええっとねぇ～～、（乙）を押すとクリスのヌイグルミが爆発して、（甲）を押すとウェスカーのサングラスが爆発するわ」
「あッ、危ねえェエエエエエ――――――――ッ！！」
　私はお気に入りのサングラスを思いっきり投げ捨てる。
「クリス、何してるッ！？　早くその珍妙なヌイグルミから離れろッ！」
　私はカナリ焦り気味で警告する。
「ダメだ……オレにはできない」
「………は？」
「このヌイグルミは誕生日に妹からもらったプレゼントなんだ……毎晩抱き枕として一緒に寝ているんだッ！」
　クリス、エピソード的にはイイ話なんだが、使用用途が圧倒的に気持ち悪い。
「あひゃひゃひゃひゃッ！　うそうそっ、そんなの嘘よッ！　やっだもう、本気にしちゃってさあ！」
　腹を抱えて笑うジル。このアマ……ラクーン市警に戻ったら絶対減給してやる。
「仕方ない、オマエにはコレを渡しておく」
　そう言って私はサングラスをかけ直しながら、『コンバットナイフ（M９）』をジルに貸してやった。アメリカ軍に正式採用されている、自動小銃に装着できる銃剣だ。そして、最後に……
●バリー＝コルトパイソン、娘達の写真、遺書、紙オムツ（大人用）
「一応、強力な武器を持ってきているのはいい。娘の写真も別に構わん。で……オマエは遺書とオムツをセットで持ち歩いているのか？」

私はもうなんか、真面目に質問する気力が失せはじめていた。
「そ、そりゃそうだろ……常に危険と隣り合わせな仕事だからな。いきなりさっきみたいな野犬に襲われて、心臓麻痺なんか起こした時のためだ」
バリーのハートはガラスどころか豆腐でできているようだ。
「で、この紙オムツなんだが……どうにかならんのか？」
「ま、まさかッ、使うなって言うのかッ！？」
バリー、本気でたじろぐ。どんだけ股間の括約筋が緩いんだよ。
「使うなとは言わんが、正直……オマエには恥や外聞を気にする余裕は無いのか？」
「あってたまるか！！」
何で仁王立ちで威張るんだよ。
「まあ、いい。予備の弾薬なら私が少し持っているし、四人でかたまって行動すれば何とかなるだろう」
私はサングラスを中指でクイッと直し、部下達に一瞥をくれた。
「で、これからどうするワケ？　あたし達の任務はブラヴォーチームの捜索……だけど、夜間の山中はさっきみたいな野犬の群れが現れて危険よ」
ジルが私のことをキッと睨みつけながら言った。
「ああ、その通りだ。山中での捜索は明日の昼間に変更する。そして、今からこの館の中を隅々まで探索する」
「どうしてだ？」
クリスがマヌケな面で問う。バナナの皮をむきながら。
「もしかすると、ブラヴォーチームのメンバーが我々と同様にこの館にたどり着き、中を彷徨っているのかもしれん」
「な、なるほど……可能性はあるな」
バリーが頷く。紙オムツをはきながら。
「じゃあ、どうする？　この玄関ホールからいくつか扉が見えてるけど、ドコから行ってみる？」
ジル、やる気を出してくれるのはかまわんが、ケータイでモバゲ

ーにアクセスするんじゃない。
「よし、まずは左に見えるデカイ扉の部屋からだ。いいか、今のところ人の気配は無いが、どんなアクシデントに見舞われるか分からん。各自、決して気を緩めるなッ！」
私は檄を飛ばしてやる。
「おおッ！」
「了解したわッ！」
「た～～か～～の～～つ～～め～～！」
おい、変なのが混じってるぞ。おそらく、家で娘達と観た深夜アニメに影響されたんだろうが、ここはあえて無視。

ガチャ――――
その大きな扉に鍵はかかっておらず、すんなりと開いた。
「へえ～～、どうやら食堂みたいね。人は……いないようね」
最初に入ったジルが周囲を警戒しながら小声で呟く。
カッチ、カッチ、カッチ……
年代物の柱時計が静寂の中で時を刻んでいる。
「だが、ドコかに人がいるのは確かだな。暖炉に火がついている」
バリーの言う通り、瀟洒な造りの暖炉の中で炎が燃え盛っている。
「気味が悪いなァ……さっきまで生活していた住人が、煙のように消えちまったみたいだぜ……」
クリスが中央の大きなテーブルの表面を指でなぞり、ポツリと呟いた。その広い食堂は2階まで吹き抜けになっており、古めかしい内装だが丈夫な材質で建てられているせいか、破損や劣化の様子は見て取れない。
「おい、コイツを見てみろ……」
私はそう言って暖炉の前の床を指差した。そこにはおびただしい量の血が水溜りを作っていて、暖炉の炎に照らされてより一層の不気味さを漂わせている。
「おいおい、マジかよ……！」

クリスが思わず息を呑んだ。
「どうやら、“アクシデント”ってのがもう登場したみたいね」
ジルがナイフの柄を力強く握る。
「や、ヤバイ……は、吐きそう……！」
バリー、よそでやれ。
（さて、頑張ってもらうぞ――諸君）
私はこの後の展開に期待し、思わず口元を歪めるのだった。

死体を見つけたら、食べる前に通報してください

「よし、まずは二手に別れる。ジルとバリーでこの食堂をしばらく調査してくれ。私とクリスはこの扉から出て近辺を調べてみる」
そう言って私は、食堂に入って来たのとは別の小さいドアを指差した。
「いいの？　さっきは四人でかたまって行動した方がイイみたいな事言ってたけど」
ジルが少々心配そうに言う。
「心配ない。そう遠くにはいかない。捜索に時間がかかる場合、玄関ホールを中心になるべく安全地帯を確保して、一帯を拠点にした方が効率的だ」
「分かったわ。じゃあ、頼んだわよ。クリス」
「おお、任せておけ」
バタンッ――
ドアが音をたてて閉まる。私とクリスは横に伸びた細長い廊下に出た。左か右か……私は当然、この洋館の内部構造を把握しているため、ドコに何の部屋があり、どんなトラップやB．O．W．が配置されているか知っている。
「よし、まずは左に向かおう」
私はそう言ってクリスに先に行くよう手で合図する。左に行った先は、さっきの食堂で食事をした者達がコーヒーや紅茶を楽しむ『ティールーム』になっている。が、現状は……
（さて、クリス……まずはオマエの緊急対応能力を試させてもらう）
私はサングラスを中指でクイッとやりながら、自分の拳銃に手をかけた。
グチャ、グチャ、グチャ……グシュゥゥゥ――――

「な、何だ……？」
肉の塊を撹拌するような生々しい音がして、クリスの歩く足が止まる。
「お、おい……アンタ、ここの住人か？」
人がいた。クリスの方に背中を向けて、床に両膝をついて何かしている。妙だ……赤黒い染みで所々が汚れ、ボロボロに擦り切れた服。こんな豪勢な館に住む住人の姿とはとても思えないし、床一面に広がる液体は――
「ま、マジかよッ――――！？」
おびただしい量の血だまりには一体の人間が倒れており、その人間の体にはいくつも食い千切られた痕が。
「なんてことだ……アレは、ケネスじゃないか！」
私は銃を片手に握りながら知らなかったフリを演じる。
『ケネス・Ｊ・サリバン』――４５歳。血液型・Ｏ型。身長１８８センチ。体重９６．８キロ。化学兵器に対する対策・防護専門。偵察、陣地確保といった危険を伴う任務につく。無口でチーム最年長、チームでは唯一の黒人系男性。彼は今――死んでいる。ダレがどうみても死んでいる。首の肉を食い破られているのだから。
「貴様、動くんじゃない！」
いきなりの惨状を目にしたクリスが、さっき渡したベレッタを手に――

＜うゥゥゥゥ～～……あァァァァ～～……＞

“ソレ”は乾いた呻き声を漏らしながらゆっくりと立ち上がった。そして、クリス達の方を振り向いたその顔は、どう見てもまともな状況にある人間の面ではなかった。髪の毛はほとんど抜け落ち、皮膚は青白く変色して所々が腐敗している。口元にはケネスのモノと思われる血がベットリとこびりついていた。
「どうした、クリス！？　こいつはどう見てもバケモノだ！　早く

撃て！」
「だ、ダメだッ……弾が出ない！」
「落ち着け、クリス！　オマエが構えているのはバナナだッ！　十分に熟したバナナだッ！」
「し、しまった、緊張のあまり……オレとしたことが！」
　ムキムキ……ムキムキ……
「これでよし」
“よし”じゃねえッ！　皮をむいてる場合じゃないだろうがッ！」
　モグモグ……モグモグ……
「食うなよッ！」
「し、しまった……オレの脳が制御しきれず……つい」
　クリスの人生は脊髄反射の積み重ねのようだ。つまり、魚や昆虫と同じ部類。人類失格、バンザイ。
（こいつはヒドイ……ここはひとまず大食堂に退却だな）
　戦闘データを記録するタイミングを失った私は、クリスの襟首を掴んで引っ張っていく。

――――――バタンッ！
「ちょ……どうしたの、二人とも！？」
　食いかけのバナナを喉につまらせながら引きずられてきたクリスと、慌てる私の姿を見たジルがおののく。
「き、気をつけろ！　この先にとんでもないバケモノがいた！　ケネスが食い殺されていたんだ！」
　私はいつもより更に真剣な声で警告してやった。いきなり予定が狂ったが、こうなれば仕方がない。この大食堂にもうすぐ踏み込んでくるであろうさっきのバケモノ……ヤツにどう対応するか、ジルとバリーの分のデータも同時に記録するとしよう。
「ま、待てよッ、ウェスカー……“バケモノ”って一体、何のコトだよ！？」
　柱時計を調べていたバリーがコルトをホルスターから抜いた。『

コルトパイソン』。高威力のマグナム銃で、３５７マグナム弾仕様のリボルバー式。
「確信は無いが、アレは……おそらく『ゾンビ』ってヤツだ」
『ゾンビ』――正確には“活性死者”と呼ばれる、Ｔ－ウィルスに感染した人間の初期段階。ウィルスによる遺伝子変質で新陳代謝が活発化しており、強靭な力や、銃で撃たれても死なない体力を持つに至るが、同時に細胞の壊死サイクルも早くなるため、外見は所々が腐り落ちた死体のようになっている。ウィルスにより前頭葉が破壊されるため、思考力はほとんど無く、代謝の増大に伴う激しいエネルギー消費から常に強い飢餓感を抱え、食欲を満たそうと食物を求めるだけの存在。感染前の習慣、記憶は多少残っているが、思考能力を失っているため、行動は自分に関わりのある場所を徘徊したり、ドアの開閉を行う事のみにとどまる。
「ゾンビですって？　モ〇ダー、アナタ疲れてるのよ。ゾンビなんて架空のモンスターが現実に存在するハズがないじゃない」
ス〇リー……いや、ジルが半分呆れた感じで言う。
「い、いや、マジだって！　オレもケネスが食われてるとこ見たし！」
クリス、慌てながら次のバナナの皮をむくんじゃない。

ギィィィィィィィィ……

ノブが回り、小さなドアがゆっくりと開く。そして、半開きになったその隙間から――“ソレ”はヌッとその威容を現した。

＞ｉ３３５９４－３９６１＜

「ほんぎゃあああああああああああああああああああああああああああ――――ッッッ！！」

バリー、大・絶・叫。と、同時にジルが――
「せいやッ！！」
――バンッ！
ドアめがけて跳び蹴り。当然、大食堂の中に入りかけていたソイツは、ドアと壁の間に思いっ切り挟まれるワケで。
＜あァァァァァァァ――うちッ！！＞
ゾンビが痛がっとる。
＜いきなり何しはりますのォ～～ん！　わてが食事中に後ろでバタバタ騒がしいから、こうして様子見に来ただけですやん～～！＞
しかも、流暢にしゃべってる。
「クリス、コイツがそうなの？」
「あ、ああ……ソイツに間違いない」
「ふ～～ん、見た目は確かにグロいわね。けど、ホラーメイクか何かじゃないの？」
ジルはグイグイと脚に力をこめながら、目を細めてゾンビの方を睨みつけている。
＜おッ、よ～～見たらキレイなネーチャンがおるやないけッ！　どうや？　わてと一緒に腐乱ス料理でも食わへんか？＞
ダジャレまで飛び出す始末だ。
（一体、どうなっているんだ……外のゾンビ犬といい、このゾンビといい……Ｔ－ウィルスが想定外の方向に進化しだしたのか？）
私は少々考え込んでしまいそうになったが、ここは一先ず撃退しなくては。
パンッパンッパンッ――――！！
ベレッタを構えて連射。ゾンビの頭部に全て命中する。
＜あうッ、あうッ、イタタタっ！　何すんねん、このグラサンオヤジがッ！　そんな危ないモン撃ってきはったら、わて死んでしまうがなッ……って、あ、わてもう死んどるわ＞
おかしい。胴体ならともかく、頭部にあれだけ９ミリ弾を食らっ

てまだ倒れないとは。
「コイツならどう！？」
ザクッ――
コンバットナイフをドアごしに突き立てるジル。その刃先はゾンビのデリケートゾーンにヒット。
＜おォォォォォォォォ――――うちッ！！　そ、それはあきまへんわぁ～～……人間はやめても男は廃業したくありまへんでぇ～～……＞
――――ドサッ
倒れた。股間を両手で押さえながら。
「さすがだぜ、ジル！」
クリスが親指立てて笑顔。
「見たかッ！　署内で“泌尿器スレイヤー”と陰口叩かれるあたしの実力ッ！」
ジルが中指おっ立てて笑顔を返す。おい……一体、署内で何やってやがる。
（どうにもおかしい……イヤな予感がしてきた）
私の頬を不吉な汗が伝う。このまま館の探索を続行してもいいものなのか？　B．O．W．達のこの変貌ぶり……計画に多大な支障をきたすのでは？　だが、もう後には引けない。私は自分の仕事を全うし、必ず成果をあげてみせる！
「う……うぅぅぅ……ボ、ボッシュート、です……」
失神したバリーが後ろの方で意味不明にうめいていた。

鉢植えの植物を引っこ抜くという発想

「これは……ヒドイわね」
ジルが片手を自分の口元にあてがいながら呟いた。彼女の目の前には、首を食い破られて果てたケネスの遺体が横たわっており、恐怖にひきつって両目をカッと見開いたままになっている。実に無念な最期をとげたようだ。
「狂ってやがる……ゾンビか何か知らんが、人間を食い殺すなんて正気の沙汰じゃねえよ」
そう言ってクリスはケネスの遺体の傍でしゃがみこみ、遺体の状態を観察する。
「クリス、何か他に変わった所はあるか？」
ズリズリ……ズリズリ……
私は気絶したままのバリーを引きずりながら、クリスに問う。
「……ん？　何か手に持ってるぞ」
クリスがケネスの手に握られていた物体を発見する。ソレは――『フィルム』だった。おそらく、この館の中を撮影したものだろう。再生するための設備があれば、中身を確認してチームメンバーの捜索に役立つかもしれない。
「よし、フィルムは私が預かろう。全員、先に進むぞ」
私はケネスの猟奇死体が視界に入らぬよう、バリーに目隠しをしてやってから、彼の頬をペチペチと叩いて起こしてやる。
「バリー、しっかりしろ。探索を続けるぞ、立てるか？」
「……んんッ、う……うぅぅぅ……ん？」
バリーが目を覚ます。オハヨウ、役立たず。
「うわあああああああああッッッ！　ま、真っ暗だァァァァァ！
ついにこの世が終焉を迎えてしまったァァァァァ――――――……げふッ」

バリーが再度失神する。オヤスミ、役立たず。
「仕方ない。バリーのメンタル面が回復するまで、ここに寝かせておくとしよう」
そう言って私は気絶したバリーを優しく寝かせてやった。ケネスの死骸の隣に……。

＞i337714—39961＜

バタンッ——
ティールーム真横にあるドアを開くと、薄暗い廊下に出た。
「ん？　何よ……コレ？」
廊下を行った先には階段が見えており、その手前に少し開けた空間があって、小さな棚のような家具の上に鳥カゴが乗っていた。
「真っ黒な羽が幾つも落ちてるな……カラスでも飼ってたのか？」
クリスが辺りに散乱している羽を指でつまみ上げ、渋い表情になっている。鳥カゴでカラスを飼う——もし、事実なら、この洋館の住人はどうしようもなくイカレている。だからなのか……さっきのようにやたらとハイテンションな死体もどきが居るのは。
「クリス、ジル、そこの鉢植えに生えている緑色の植物を調べてみろ」
私はそう言って、階段のすぐ脇に並んでいた二つの鉢植えを指差した。ソレは『グリーンハーブ』。アークレイ山中に自生している特殊な植物だ。どう特殊なのか、私の口から説明したいところだが、そうしてしまうと「何故、そんな効果まで詳しく知っている？　ま、まさかッ！？」——ってなコトになりかねない。だから、ここはクリスとジルの両名にそれとなく使用用途を教えてやらねばならない。いくら特殊部隊の精鋭達とはいえ、この洋館の制圧だけでも無傷で済むワケはないのだから。

「何よ、ただの観葉植物じゃない」
「そうだな。特に変わったトコは無いな」
二人とも全く関心は無し。まあ、それが普通のリアクションだ。グロテスクなバケモノが出没するような館に生えている植物を使って、体力やケガの回復を図ろうなんて発想……その人間の良識を疑いかねない。
「まあ、待て待て。これ見よがしに並べてあるという事は、何か意味があるハズだ」
私は疑惑が持たれないよう、自分のバックパックからおもむろに携帯端末（ＰＤＡ）を取り出して操作した。
「多分、コレだな。うん、間違いない」
「一体、何なのよ？」
「コレを見てみろ」
私はジルにＰＤＡを手渡した。モニターにはアークレイ山中とその近辺に自生する、珍しい植物の一覧が映っている。
「ええっと～～……『グリーンハーブ』？　使用することで体力を少々回復できます。他のハーブと組み合わせることにより、別の効果を発揮する場合も」
ジルはモニターを見つめながら、鉢植えからグリーンハーブを摘んだ。
「ふ～～ん……で、どうやって使うんだ？　やっぱ“ハーブ”って言うくらいだから、お茶にいれたりして飲むのか？」
クリスが小さく首を傾げた。そう……実のところ、そこが一番の問題なのである。私としても、このハーブの使用方法には多少の疑問点を抱えているのだ。

※ハーブの正しい使用方法（例）※
？　煎じて飲む（専用の道具一式が必要になってしまう）
？　豪快に生食い（確実に消化不良を起こす）
？　潰して汁を傷口に塗る（一番現実的だが、塗ってすぐ傷口が

治癒したらソイツこそバケモノ）
？　嗅ぐ（ダメージ受ける度に葉っぱの臭いをクンクンしてる画が、ヤバイ中毒患者に見えてしまう）
？　目に入れる（単に痛いだけ）
「各自で好きに使え」
私は迷ったあげく、放任主義をきめこんだ。
「よし、それじゃあ行くか」
ハーブを分け合い、目の前の階段を上り始める。
ギシギシ……
「アン★　アン★」
ギシギシ……
「アン★　アン★」
ジル、妙な擬音を呟くんじゃない。発想が完全にオッサンだ。
バタンッ――
階段を上った先にはドアがあって、開けると壁に小さな松明がある廊下に出た。ドアのすぐ右には別の通路が続いており、そちらの通路の突き当たりの所に大きな鏡があって、その鏡に――
「出やがったなッ！」
クリスが身構える。鏡に映る少々小太りの動く死体。ゆっくりと歩を進め、こっちへ向かっている様子が分かった。
――パンッ！
クリス、発砲。
パリィィィィ――――ン！
割れる鏡。
「ぬッ、しまった！　残像かッ！？」
残像どころか別の物体に向かって撃ってるし。オマエは鏡の機能に戸惑う小学生か？
＜いらっしゃあ～～い！　久しぶりのエモノ、三名様ご案内やでぇ～～！＞
またしても妙に元気な歩く死体。クリスめがけて楽しそうに襲っ

てきやがった。
「近づくんじゃねえッ！」

ボゴオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォ

――ッッッ！！

クリス、殴った。素手で。
＜うっひょおおおおおおおおッ！　胴体さんサイナラぁ〜〜！＞
ゾンビの頭部が見事にブッ飛ぶ。
「やるわね、クリス。ゴリラパワーはやっぱ伊達じゃないわ」
ジルが微笑みながら親指立てたりしているが、クリス……頼むから普通に銃を使ってくれ。まともな戦闘データがとれん。
「ここはクリアだ。隣の通路から進もう」
今度は私が先頭になって、左右の壁に沢山の細長い槍が立てかけられた廊下を行く。壁に設置された小さな松明の灯りが反射して、なんとも不気味に煌めいている。そして、その通路の途中で、一体の小さな石像を発見。石像は『黄金の矢』を携えている。
「ジル、その矢を回収するんだ」
「は？　……どうしてよ？」
確かに不自然な指示だ。不法侵入した上、人の家の高価そうなオブジェを持っていこうとしている。行為自体はコソドロのソレと変わらない。が、各ポイントに設置されている様々なアイテムを回収し正しく使っていかないと、このミッションそのものはおろか、館の制圧すら不可能なのだ。精密な戦闘データを正しく記録するため、ドコに何を設置してどんな仕掛けを作動させるか……どんなタイミングでどんな資料等を発見させるか……全て緻密に計算し配置した。おかげでカナリの自腹を切った（ドンキで小道具買ったりして）。有給休暇もほとんど使い果たした（私は毎日何をやっているのだろう……そう思いながら）。そんな私の地道な努力を、いきなり徒労に終わらせるワケにはいかない。

「証拠物件の押収だ。この館で我々のメンバーの一人が殺されていたんだ。裁判で有利になるに越したことはない」
「なるほど、さすがはウェスカー。抜け目が無いわね」
ジル……騙す私が言うのもなんだが、オマエは簡単に納得し過ぎ。
「よし、次はこっちのドアから行くぞ」
我々から見て正面と右側にドアがあり、私は右側のドアを警戒しつつ開ける。同じ頃――

「う、う～～ん……あ、あれッ……皆、ドコだッ？」
ティールームで置き去りにされていたバリーが、気絶から目を覚ました。周囲を見渡しても仲間の姿は確認できず、代わりに……ケネスの変わり果てた姿がすぐ隣でコンニチハ。

「……死ぃ～ね～ば～イイのに♪　死ねばイイのにッ♪　ドコか～遠い～ト～コ～ロで♪」

ついにバリーが壊れた。珍妙な歌を口ずさみながら、大食堂の方にヨタヨタと歩いて行ってしまった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7298x/

たった今、現代医学が敗北しました

2011年10月28日07時04分発行